

### 第3回 富山県経済・文化長期ビジョン懇話会青年部会 議事要旨

1 日時：平成28年3月4日（金）10：00～11：30

2 場所：県民会館8階バンケットホール

3 出席委員（五十音順）

飯田委員、五十嵐委員、内山委員、大坪悟委員、大坪洋介委員、大屋委員、黒川委員、清水委員、高島千絵委員、高田委員、田中委員、中林委員、野尻委員、野村委員、濱角委員、針木委員、盤若委員、藤井委員、向井委員、森委員

4 議事

- (1) 取りまとめに向けて
- (2) 意見交換

5 発言要旨

(1) 開催挨拶 石井知事

- ・ 富山の未来を創造するという目的で、懇話会・青年部会にて議論を行っていただいているが、これまでに委員から頂いたご意見の方向性で、早く手をつけなければいけないことを平成28年度予算案の中に盛り込んでいる。

例えば、IoT関係では欧米の第4次産業革命の動きに遅れないように、むしろ富山型で進めていこうという検討会・研究会を発足することになっている。また、医薬品分野は今後も更なる伸びが期待されるが、印刷やパッケージなどの関連産業ももっとハイレベルなものにして、さらなる活性化を生み出そうということや、伝統工芸の分野では新しいチャレンジをする経営者もたくさん出てきており心強いが、伝統的な技法の継承といった点では、このまま手をこまねいていると10年ぐらいたつと技を継承する人がいなくなってしまうということが考えられることから、後継者を育成する仕組みを新たに作ろうという予算も計上している。

- ・ 本日は、青年部会としての意見を取りまとめていただき、4月12日開催予定の懇話会において、皆さまのご意見を代表の方から提言してもらおうこととしている。今日は、まだまとめの段階であるので、そうした中で特に何をポイントにするかということ念頭に置いて、十分ご審議いただきたい。

- ・ 長期ビジョンがまとまるのは夏ぐらいになるのではないかと思うが、その前に、素案を懇話会だけでなく、青年部会の皆さんにも説明させていただき、色々な意見を頂くという機会も設けたいと思っている。

(2) 資料説明

<事務局より資料1～3、6説明> 省略

<藤井代表幹事より資料5説明>

- ・ 資料5は、4月12日の懇話会に提出するための青年部会の取りまとめのたたき台であ

り、大きく「これまでの経過」「策定にあたっての考え方」「将来像及び採るべき展開方向」「おわりに」の4つに分かれている。本日は、懇話会にこういった形で青年部会の取りまとめとして提出するというイメージをもって「将来像及び採るべき展開方向」についてご議論いただきたいと考えている。

まず、1の「これまでの経過」では、青年部会は合同分科会を含めて5回開催されているが、これまでの振り返りとして、11月の第1回会議では皆さんからご意見を頂き、12月の合同分科会ではグラフィックファシリテーションやワールドカフェ方式で、皆さんと一緒に富山県の危機感に対しての危機意識、もしくは当事者意識をお互いに高めていくことを行った。その危機意識、当事者意識を基に、現在から未来につながる中の課題解決ということで、1月に皆さんから「採るべき具体的な行動」として100以上の提案をいただいた。それをもとに、資料2で提案が取りまとめられているが、「経済」「文化」「人」という縦軸に対して、横軸として「新たな価値創造」「グローバル&ローカル」「個々（地域）の力の磨き上げ」というキーワードをわれわれが議論した中で発見できたのではないかと考えている。

- ・ 2の「策定にあたっての考え方」だが、まず、過去の延長線上に将来のビジョンを描いていくだけではなくて、ありがたい富山県の姿を描いて考察することが重要ではないかということで、今日は未来のありがたい姿から今を語っていくという流れで議論できればと考えている。そのためには、人口減少や第4次産業革命など変化の予測をする必要があることから、事務局において資料3のエビデンスを取りまとめている。また、すぐに芽が出るものでなくても、「予測される未来社会を富山県の将来にカスタマイズして取るべき方策を検討」することとし、長期的な視点で成果を考えていく必要があるということ、そこから「富山発の日本、世界の社会的課題に解決につなげていく」ところまで取りまとめできればと考えている。

最後に、皆さんは30～40代の方が中心だが、自分自身が高齢者になったり、子どもたちが親世代になっている時代を予測し、制約はあるが、あえてその制約をポジティブに捉え直した提言をしていきたい、というのが考え方の骨子になる。

- ・ 3の「将来像及び採るべき展開方向」が一番重要なポイントであるが、採るべき展開の方向性として三つ掲げている。今までの委員の議論の中から出てきた言葉であるが、さらにブラッシュアップしていきたい。

①として、「新たな価値（経済力、文化力、教育力）を創造し続けると同時に、守るべきものが守られている（あるものを活かす）社会」がある。その下に具体例として「IoT等を活用した県内中小企業によるモノづくりネットワークの構築」などを挙げているが、こういったことが最終的には新たな価値の創造とあるものを活かす社会につながっていくのではないかという事例の一つになる。

②の「県民生活（経済、文化、人づくり）の中に『グローバルとローカル』が融合することで新たな魅力がデザインされ、国内外から人や企業が集積している社会」だが、前回の会議で、教育は非常に重要であるが、グローバル教育だけでいいのか、ローカル教育だけでいいのか、両方で戦える人材、もしくは郷土愛がちゃんと育まれた人材が重要なのではないかという議論があったが、この中に含まれると思う。

③の「個（地域）の力が、経済的にも文化的にも研磨され、ダイバーシティを尊重す

る心豊かな県民がふるさとを支え、経済と文化が響きあい共生している社会」だが、高齢化の中で労働寿命を延ばそうという話もあるが、むしろ労働できない人や障害を持った方々など、色々な方がおられる中で、多様性のある社会がこれから必要になってくるというときに、こういった考え方が重要なのではないかということで、3つにまとめている。

- ・ 「おわりに」だが、青年部会として提案のままではなく、今後もここに参加した人が一人一人フォローアップしていこうということで、どのような形でこの部会を今後継続していくかはこれからの議論だが、コアプロジェクトを作って、今回の提言をぜひこの青年部会のメンバーが中心になって推し進めていける形を提案できればと思っている。
- ・ これから、「将来像及び採るべき展開方向」の肉付けをしていきたいと思うが、幹事の事前打ち合わせにおいて、未来のありたい姿を描くことをやってみようということで、資料4の「長期ビジョンストーリー『〇〇の30年後のありたい姿』」を作成した。このビジョンストーリーは、私も事前に読んで、幹事とも意見交換したが、共感や触発されるところも非常にあり、刺激を受けた。もし、自分の分野であれば、「私はこういうことをありたい姿にしたいな」ということを皆さんも読んでいく中で多分感じると思うので、ぜひそういったところの意見をいただきたい。

<各提案者より資料4を説明>

○清水委員

【テーマ】

モノづくり集積都市として環日本海経済圏で確固たる地位を築いた富山県

【30年後のありたい姿】

- ・ 富山からアジアのいろんな国へ直行便（MRJの後継機）が就航している。
- ・ くすりの富山として国内でダントツ、アジアでも屈指の医薬品製造都市としての地位を確立している。原材料やパッケージの主資材を作る会社だけでなく、設備である副資材を作る会社も育成され、富山が医薬品の拠点であることに価値を見出して海外の医薬品メーカーが進出している。
- ・ 金属部品分野では、富山は非常に自動車依存度が高いが、30年後には脱自動車を果たして、航空宇宙・エネルギー・医薬医療といったところで県内の中小企業がネットワークを組んで、個々の強みを生かしながら営業活動を行っている。  
同時に、富山県内のモノづくり人財の育成が進んで、他県ではモノづくり企業に人が中々来ないので事業を存続できない会社が多く存在する中で、富山の中小企業は確固たる地位を築いている。
- ・ 東京大学と富山大学の共同研究によって、宇宙線研究で大きな成果を見せて、多数のノーベル賞受賞者を輩出している。

【実現するための施策・方向性】

- ・ 海外の医薬品メーカーを集積するような助成制度の創設。県内の主資材・副資材の企業を育成するため、例えば、県内の事業者へ発注した場合の減税を行うなどのインセンティブを付与する。また、中小企業のネットワークの構築を進める。
- ・ 文化では、富山のブランディングをもっと進める。例えば、宇宙＝富山といったような

ブランド化を進められないか。

- ・人づくりでは、モノづくり人財の育成などをぜひ進めていただきたい。

#### ○中林委員

##### 【テーマ】

くすり産業を基盤とした、人々との絆・多様性が尊重される精神的満足度が高い富山県

##### 【30年後のありたい姿】

- ・30年後を想像したときに、定年まで勤めた後、週3日程度働きながら孫の面倒を見ていたいというのが私のありたい姿であった。孫の面倒を見るときには、子どものために雨や雪の日に自由に遊べる全天候型の施設があればよい。
- ・ハンディキャップを持った人も社会の一員として認められて自律した生活を送るには、県全体として人々の絆を重んじたり、多様性を許容して尊重する風土が確立されていることがまず肝であると考える。

そのため、小さい頃からの富山型教育として、通常の学業に加えて、人との絆や多様性尊重を重要視し、様々なキャリア教育や郷土愛醸成を充実させたことにより、絆を重んじ多様性を許容し尊重する風土が築かれている。更に、人々の絆や多様性の尊重を重要視することで、育児や介護、地域包括ケア制度も軌道に乗っていることが理想である。

- ・教育に投資する財源は、キラーコンテンツである「くすりの富山」の再構築により生み出されている。医薬品政府機関や民間研究施設の誘致、薬学教育の強化といった産官学一体となった取組みが功を奏し、くすり関連産業が更に発展し、県税収が大幅に増え高校教育まで無償化されているということが一つ大きなポイントになると思っている。
- ・このようなことで、富山が「豊かな心を持った人が集まり、精神的に満たされ充実した日々を過ごせる地域」として世界的に認知され、人間の内面も高める教育環境・手厚い子育て支援も全国的な評価が高くなり、人口の移動均衡が達成されていくことが理想である。

##### 【実現するための方向性・施策】

- ・薬産業の集積のための産官学の連携や県有財産の積極的な活用
- ・たくさんある文化施設を子育て施設と組み合わせることで、子どもに小さい頃から文化的な良さ、魅力を認知させていくことが重要

#### ○田村委員（欠席のため藤井代表幹事が代わって説明）

##### 【テーマ】

強みを生かして成長を続ける富山県

##### 【30年後のありたい姿】

- ・富山県がダントツであること、オンリーワンであることにこだわって進めればよい。
- ・県と地域の有力企業が共同出資で設立したベンチャー育成機関による開発された技術の売込や、資金調達の支援により、地場企業のオープンイノベーションが定着し、“儲かる技術”が見える化され、産業が非常に活性化されている。富山県での創業者数が廃業者数を上回っている。
- ・富山県内全域にWi-fi環境が整えられたことで、育児中での出勤できなくても、常に会社

と繋がり、仕事ができる環境にある。

- ・英語教育に力を入れたおかげで、海外とのコミュニケーションが達者となっている。また、労働力としての女性の活用が非常に経済に貢献し、影響を与えている。
- ・立山から富山湾まで 4000mの「日本イチの高低差を味わう」と打ち出した、日帰りで雄山登山から富山湾深海を潜水するツアーが人気となるなど、オンリーワンの観光資源をつくっていくことが重要である。

#### ○田中委員

##### 【テーマ】

シニア世代、女性がいきいき輝ける富山県

##### 【30年後のありたい姿】

- ・定年制の廃止、健康寿命延伸に向けた取り組みの推進により70歳で働いている人がたくさんいる。
- ・仕事と育児を両立するための支援制度が整っていて、子どもがいても仕事をしながらいきいき輝けることが当たり前の世の中になっている。急な子どもの発熱にも対応できるように、病児保育が併設されている保育所が当たり前となっていればよい。富山県は共働き率全国No.1、出生率も2.5と非常に高い。
- ・合同分科会で高齢者はパチンコに行っている人が多く、子どもには遊び場がないとの意見もあったので、子どもから高齢者まで楽しめる全天候型の文化・スポーツ施設がいくつあればよい。そこでは運動もでき、文化教養も学べる。  
また、観光に来て富山に魅了されて住み着いた外国人が講師となり、無料で英語を学べるといったこともでき、小さな子どもも英語を話せるようになっている。
- ・女性を中心に県外に転出する若者が多いことから、小さい頃から富山の企業の魅力を感じてもらうことが重要であることから、富山版キッザニア（子供の就業体験）を設け、協賛企業の就業体験ができることで魅力を感じてもらえばよい。
- ・平日は非常に仕事に忙しくて、休日は孫と遊ぶのに一生懸命という感じで、毎日楽しくいきいきと生活できていたらと考えてストーリーを書いた。

#### ○大屋委員

##### 【テーマ】

女性の労働力の引上げで潜在成長率を維持した富山県

##### 【30年後のありたい姿】

- ・若い世代の労働力人口が増加、とりわけ女性の就業者が30年前を上回り生産年齢人口が増加している。また、富山は仕事と子育てが両立できる県としてイメージが定着している。  
これには、富山県が人口減少に対して、女性の労働力人口を引き上げることで潜在成長率を維持しようとした政策を打ち出し、女性の就業機会創出のために三次産業の誘致に注力したこと、県の誘致活動で専門学校が開校、国公立・私立大学も産業構造と共に変化し、女子学生を意識した学校・学部が増えたことで、これらの卒業生が県内の三次産業へ就職し、県外転出が減少したことによるものである。

- ・ また、産業を見渡すと、モノづくりは依然として進化を続けて、医薬品分野や金属、機械、電子部品がなお富山県の二次産業を支えている状況にある。

【実現するための施策・方向性】

- ・ 物事を成し遂げるときにはホップ・ステップ・ジャンプというプロセスが必ず必要だが、人口が落ちても潜在成長力を維持したいというのがジャンプで、そのために生産年齢人口とりわけ女性の労働力人口を引き上げることがステップで、その仕掛けのホップとして、女性の就業のための第3次産業の誘致、地域単位での子育て支援、大学、専門学校の新設に取り組めばよい。

○藤井委員

【テーマ】

認知症が少なく社会的貢献度が高い人たちがいきいきと築く、寛容で豊かな富山県

【30年後のありたい姿】

- ・ 65歳以上高齢者率は40%に迫る勢いだが、認知症を発症している人は5%を切っている。「脳と体の健康モニタリング」が40代以上を対象に定期的実施されたことや予防医学・予防サプリメントの発達により県内の健康寿命が80歳へと延伸した。
- ・ 病院には「なにかが起ってから」行くのではなく、「なにかが起る前に」行くことが当たり前となり、慢性期の医療費が下がり、その予算が予防等に配分されている。
- ・ 要介護認定を受けない方がお得な生活ができるようになっている社会が実現されている。例えば、携帯電話や車の維持費が無料で使えるといったことや、社会的な貢献度に応じたソーシャルキャピタルポイントがあって、地域活動や自身が健康であること、郷土文化の継承を行うことなどによってポイントに換算され、生活に還元されるようになっている。
- ・ 富山の豊かな水循環食文化が世界的に発信されて、「社会貢献度の高い人が寛容で豊かに暮らすエリア」が富山のブランドとして認識されている。

【実現するための施策・方向性】

- ・ 介護認定を受けない方がお得となる互助プラットフォームの設計
- ・ 地域文化（地元愛）の振興・継承推進

(3) 意見交換

(委員)

- ・ 農業をやっている者の理想として富山の水田を守りたいと思っている。だんだんと高齢化による担い手がいなくなっており、専業農家にどんどん農地が集まってくるが、私の30年後のありたい姿としては、兼業農家率日本一が富山らしいので、これにより全国一位の水田率を維持され、お米のブランドも定着してほしいと思う。これには、兼業農家の主な働き場所である中小企業がすごく元気で、地域に根差した人づくりという目標を掲げて連携することで、農作業をするための休暇が取りやすくなっているという環境になればよい。
- ・ 一方で、TPPの関係もあり、大規模な農家は米だけでなく、輸出も視野に園芸にも取り組む必要がある。そのためには、米作りで手一杯の専業農家に対する創業支援が必要

であり、ICTを入れた施設園芸団地を造成し、とやま農業カレッジと連携して富山の環境に合った野菜を考えていくことで、30年後には独立して輸出を行える施設園芸ができる環境にあるということが理想である。

(藤井代表幹事)

- ・ 今までの意見では第二次産業のモノづくり、あとは高齢者福祉も含めた第三次産業のサービス業においても話があったが、一次産業の視点から、一次産業をさらにICTもしくはIoTで活性化していくというのは非常に重要な意見である。

(委員)

- ・ グローバル教育を強化することで国際感覚を養って、国際交流を活発にしていこうことが第一だと思っている。

そのように意図的に新しい環境が生まれることで、産業の創出にもつながっていく。また、国際交流が活発になることで国際結婚などがどんどんすすみ、富山型ハイブリッド子孫のような方々が増えていく。富山を支える若者が少なくなっていく中で、富山の良さや歴史などを世界に伝えていこうとするときには、こうした富山で育った富山型ハイブリッド子孫の方などが海外に出て活躍することで富山の良さを伝えたり、県民と海外の方々との交流を図ることによって県内でベンチャーが起こるといった環境をつくっていければよいのではないかと。そうすれば、国際便なども活発になるし、富山県が率先して国際都市になっていくことも可能になると思う。

(藤井代表幹事)

- ・ グローバル教育や国際交流といった部分はよく語られるところであるが、具体的に「富山型ハイブリッド子孫」というくくり方は非常に面白いのではないかと。

(委員)

- ・ 良くも悪くも県民性は変わらないと思うが、県外からきた人間から見たものすごく特徴ある富山の県民性は、勤勉性とコツコツと持続する力、である。この県民性は、土地に根付いた立山連峰や富山湾といった地理的なもの、立山信仰などの昔の文化からきているのではないかと。こうした神秘性はブランドとして打ち出せるのではないかと。
- ・ また、30年後の姿としては、人口が減少するというトレンドは変わらない中で、富山市の次世代に向けていくコンパクトシティ、加賀藩の影響を受けた高岡市の伝統文化の都市という、現在から未来、過去から現在という2つの特徴的な都市が中心となっている富山県がある。その中で、経済は、県民の勤勉性や地理的な要因として地震が少ない・災害に強いということ、航空機や新幹線などの交通インフラの利便性を活かして、くすりや製造業、農業などのものづくりに特化して、ダントツのモノづくりの県を目指す。アイデアの部分は、アウトソーシングという形で世界から富山に興味を持ってもらった方に提供してもらえばよい。

ダイバーシティの中で、ITの役割としては2つあるが、1つはこれをやりたいということ加速するツールとして、もう一つは富山と世界をつなぐツールの役割があると

考えている。

(藤井代表幹事)

- ・ 断トツでナンバーワンでなければ意味がないのではないかという意見は、実は他の方からも述べられているが、モノづくりに逆にフォーカスしていくのは、一つの考えとしてはあるのではないか。

(委員)

- ・ 田中委員のキッザニア富山にとっても共感した。30年後を考えるとインターンシップの年齢を下げて、さらに児童教育での職能訓練を義務化して欲しいと思う。  
製造業の仲間と一緒に20年ほど前から小5を対象に「ものづくり・デザイン科」として、工場見学や職人による指導の下での体験、職人が美術の時間に教鞭をとるということをやっているが、実際にその体験を受けた子どもが何人も地場産業に就職している。「5年生のときに見学に来ました」「そういう職人になりたいと思ってデザインの学校で学んできました」と言ってもらえており、これが事業継承の一つの形ではないかと思うので、ぜひ「キッザニア富山」を、それも義務化していただきたい。

(委員)

- ・ I o t という分野で空間というものを数値化して新しいものを生み出す取り組みが一つあるのではないか。情報を集めて、それをどう生かすかという部分で、若い学生の今どきの生活スタイルに照らし合わせた時に、新しい価値が生まれるのではないか。

(委員)

- ・ 海外の友人のライフスタイルをみていると5時になると友人や家族と遊びに行くのが当たり前、休暇を2か月取るということもある。私自身は、30年後の60代では働いていたくなく、人生の素晴らしさを伝えられるような人間になりたいと思っているが、挙げられた施策を進めると働くための人間をつくる施策ばかりが増えないか、危惧している。一生働き続けて終わるような人生にはしたくない、輝ける未来を想像できるような教育が大事だと思う。

教育で今後一番大事なのは英語教育だが、その次にIT教育が重要であると思っている。海外ではIT教育が進んでおり、子供たちが普通にアプリを開発したり、ホームページを作れるようになっているので、本県でもHP作成やアプリの開発ができる教育環境を増やし、世界中のどこでもお金を稼げるような人を育てられるとよいと思う。

(藤井代表幹事)

- ・ 委員の中でも、幹事の話でも、30年後はもう働いていたくない、どこかに遊びに行きたいという話も出ていたが、「働く」ことの定義もまたいろいろあるとは思いますが、多様な人生が可能であるということ、それも事前の教育があつてこそということがポイントだったと思う。

(委員)

- ・ 琴などの音楽を通して富山の良さを生かせるか考えたときに、富山ではアマチュアが海外と行き来して、直接海外に発信するというを行う人が多いが、更に行き来できるような環境となればよい。

ヨーロッパでは、今、日本の文化に憧れを持つ人がいて関心も高いが、日本人は日本の文化のことをよく思ってくれている方が少ないのではないかという印象がすごくある。日本らしさや良さをもっともっと引き上げて、例えば先ほど意見のあった神秘的な部分をもっと文化的に取り入れていかなければいけないと思う。

今は人工的な音が多いが、自然を取り入れた音づくりを通して富山の音楽というものを作っていけたらよいと思う

- ・ 富山の良さは立山連峰や富山湾といった豊かな自然であり、子どもたちがゲームではなくて自然と戯れる環境づくりを重視していかないといけない。

遊ぶことで学べる環境になればよい、富山にたくさんの外国人がいて、看板の外国語表記も増えれば自然と英語が学べるし、楽しみながら学べる環境が増えれば、そこから新しい文化が生まれるのではないか。

(藤井代表幹事)

- ・ 富山の自然の豊かさ、またモノづくりの相反した感じのところがまた新しいものを生み出していくのではないかと感じた。また、遊びながら学べるのもすごく重要なポイントだと思う。

(委員)

- ・ 「文化とは何か」と考えると難しい。文化は時間軸で考えれば歴史であったり、地理であったり、音楽であったり、美術であったり、ファッション用語でいうとオートクチュールからプレタポルテまで生活様式として見える化されたコミュニケーションを文化と仮定するならば、富山県人のコミュニケーション能力を育てる必要があると思う。

コミュニケーションデザインとは何かと考えると、知性と理性と感性のサイクルだと思う。そう考えると、「五感を育む富山」を30年後に狙ったらよいのではないか、例えば、視覚(本物を知る)・触覚(ジェスチャー)、味覚(食の富山)・聴覚(音を学ぶなら富山と思ってもらえる)・臭覚(富山はいい匂い、お花がいっぱいある富山、日本一いいにおいがするおじさんがいる富山(笑))。

(藤井代表幹事)

- ・ 発展していくのはいいですね。五感を育むということで、まず、委員にいい匂いをぜひ身に付けていただければと思います(笑)。

(委員)

- ・ グローバルとローカルが融合した富山県になっていたらよいと思う。東南アジア、中国を含め近い位置にあるので、河川敷にある空港で難しいかもしれないが、ハブ空港化してそこから世界に飛び立てるようになればよい。

- ・ 富山市が環境未来都市となっているが、県全体が環境未来都市となればよい。
- ・ 東南アジアにおいては、最終処分場の中でゴミからモノを取って生活し、教育を受けていない子どもがたくさんいる一方で、お金持ちも多く、貧富の格差が大きい。富山の環境技術や都市インフラをそういった国々に教育したり、伝えることにより今より良い環境にできるのではないか。
- ・ 富山県人としての精神性や感性や教育などもうまく伝えながら、富山だけでなくアジア全体が一緒になって成長していけるようになっていくとよい。

(藤井代表幹事)

- ・ 富山がハブとなって、空港もハブだと言っていましたけれども、さらに富山がハブとなってアジアを豊かにしていくというイメージだったかと思う。

(4) その他

(藤井代表幹事)

- ・ 資料4の「長期ビジョンストーリー ○○の30年後のありたい姿」をぜひ書いてみたいという方は3月15日に幹事会議があるので、それまでに提出してもらいたい。

また、4月12日に懇話会があり、そこで青年部会の取りまとめを報告することとしているが、資料5に今日の意見を踏まえてブラッシュアップしたものを提出したいと考えがえている。この取りまとめに関しては幹事に一任いただきたいが、委員の皆さんよろしいでしょうか。

(了承の声)

なお、3月15日の幹事会議までに意見があれば、それまでにいただきたい。